

唯心念佛

三對事

三界唯一心。心外無別法。心佛及衆生。是三無差別。

一者能化所化對

佛爲能化。大悲救我。我者所化。信心念佛。譬如二鏡。相對互照。心影質三。展轉不離。

二者因位果位對

今此三界。漸修善根。當悟一心。則是大覺。種子現行。猶如子果。今凡後佛。豈謂異人。

三者俗諦眞諦對

有爲事相。凡聖雖異。無我理性。迷悟不隔。以妄想心。念眞如佛。還似冰水。結解是一。我宗義門誠雖且千。粗尋大綱。不過三門。所謂體用門。因果門。相性門也。三門各有不一不異之二門。今三重者則依其趣。又第一者自他身對。第二者自身之中前後對。第三者一念之中論之。其理性還可通初二。抑經文舉心佛衆生三種。今三重各開二爲能念所念。以心一字可令通其二種之中也。

唯心念仏

三對の事

三界は唯だ一心なり。心の外に別の法無し。心と仏及び衆生。是の三に差別無し。

一には能化所化の対

仏は能化と爲す。大悲我を救う。我は所化なり。信心と念仏は譬へば二の鏡の相對して互ひに照らすが如し。心と影と質の三は展轉して離れず。

二には因位果位の対

今此の三界は漸く善根を修め。当に一心を悟るべし。則ち是れ大覺なり。種子現行するはなほ子と果の如し。今は凡にして後には仏なり。豈に異人と謂んや。

三には俗諦眞諦の対

有爲の事相は凡と聖と異なると雖も。無我の理性は迷と悟と隔てず。妄想心を以て眞如の仏を念ずるは還りて氷と水の結と解の是れ一なるに似たり。我が宗の義門誠に且く千と雖も、粗ぼ大綱を尋ぬれば三門を過ぎず。所謂、体用門、因果門、相性門也。三門は各の不一不異の二門有り。今三重は則ち其の趣に依るか。また第一は自他身對。第二は自身中の前後對。第三は一念の中に之れを論ず。其の理性還りて初めの二に通ずべし。抑も經文は心と仏と衆生の三種を挙ぐ。今三重は各の二を開きて能念所念と爲す。心の一字を以て其の二種の中に通ぜしむべき也。

第一對 能化所
化對

佛有_レ心。衆生亦爾。心言通_三佛與_三衆生。佛心上似_三衆生_一相分現。相分不_レ離_三佛心_一。本質不_レ離_三相分_一。如是衆生心上似_三佛相分現_一。其相不_レ離_三本質佛_一。觀行者自發_三信心_一觀_レ佛時。以_レ佛隨_レ我入_三自心中_一。此觀設雖_レ弱。如來以_三大悲智_一照_レ我時。我身心之影。佛鏡智上分明顯現。我定可_レ住_三佛心之内_一。若人疑云_三本質離_三能緣心_一。何衆生住_三佛心_一。佛亦住_三衆生心中_一哉_レ者。答可_レ云。本質不_レ離_三影像_一。影像既不_レ離_三心_一。可_レ謂_三本質皆住_三于能緣心_一也。爲言

第二對 因位果
位對

今凡位名_三衆生_一。當來我可_レ證果名_三佛_一。佛德種子在_三我第八識之中_一。其種子因不_レ離_三當來果_一。當來果不_レ離_三今因_一。可知衆生位佛位不_レ離_三一念之心_一。心通在_三因果二位_一。凡時不_レ離_三佛_一。佛位不_レ離_三凡夫_一。因果二位。不即不離故。爲言

第三對 俗諦眞
諦對

一念心中有_三眞俗二諦_一。相衆生故雖_レ妄。性佛故眞也。佛性名_三如來藏_一。萬德悉具。何遠求_三當果_一。今心之性本是佛也。譬如_三氷與_三水_一。俗諦如_レ氷。眞諦如_レ水。氷水不二。妄與_レ眞何隔。故今念_三佛觀_三佛_一。雖_レ似_三仰_三能化佛_一。諸佛同體佛釋尊三身即不_レ離_三我佛性_一。爲言

第一對 能化所化對

仏に心有り。衆生亦爾り。心の言は仏と衆生とに通ず。仏心の上に衆生に似たる相分現わる。相分は仏心を離れず。本質は相分を離れず。是の如く衆生の心の上に仏に似たる相分現わる。其の相は本質の仏を離れず。観行する者自ら信心を発して仏を觀する時、仏以て我に随ひ自心の中に入る。此の觀設ひ弱しと雖も、如來大悲智を以て我を照らす時、我が身心の影は、仏の鏡智の上に分明に顯現す。我が定は仏心の内に住すべし。若し人疑ひて本質は能緣の心を離る。何ぞ衆生仏心に住し、仏亦衆生の心中に住せんやと云はば、答へて云ふべし。本質は影像を離れず。影像既に心を離れず。本質は皆能緣の心に住すと謂ふべき也。爲言

第二對 因位果位對

今凡位を衆生と名づく。當來に我が証すべき果を仏と名づく。仏徳の種子は我が第八識の中に在り。其の種子の因は當來の果を離れず。當來の果は今の因を離れず。知るべし衆生の位と仏の位は一念の心を離れず。心は通じて因と果の二の位に在り。凡の時仏を離れず。仏の位凡夫を離れず。因と果の二の位は不即不離なるが故に。爲言

第三對 俗諦眞諦對

一念の心中に眞俗二諦有り。相は衆生の故に妄なりと雖も、性は仏の故に眞也。仏性は如來藏と名づく。万徳悉く具す。何ぞ遠く當果を求めん。今心の性は本是れ仏也。譬へば氷と水との如し。俗諦は氷の如し。眞諦は水の如し。氷と水は不二なり。妄と眞と何ぞ隔たらん。故に今仏を念じ仏を觀するは、能化の仏を仰ぐに似たりと雖も、諸仏は同体の仏にして釈尊の三身は即ち我が仏性を離れず。爲言

★原文の返り点では読めないで、若干読み替えた。

以上三門皆心言通佛及衆生中。非以心佛衆生
三相配三門也。既以衆生及佛皆歸心故唯心觀
也。我宗義門誠雖且千。粗尋大綱不過三門。所謂
體用門。因果門。相性門。各有不一不異之門。其理
性還可通初二。今三重者則依其趣歟。又第一於
一念之中論之。抑經文學心佛衆生三種。今三重
者各開一爲能念所念。以心一字可會通其二種
之中也。

問。念佛功能世舉所依。未可知唯識觀有何勝利乎。
答。深密經中以不了義經信解修行對了義教。所
集功德百分不及一。乃至難可喻知。云云。何況無
相觀門爲眞念佛。諸經之中其證幾許。凡云法云
佛其體是一。能念所念何非唯識。所謂唯識之體
者諸佛菩薩眞實心也。大定大智一念相應。大願
大悲萬德融通。無邊德海名之唯識。佛有三身。法
有_二五種。識實性眞如是法身佛也。識自相等四種
是自受用身也。識所變識分位是他受用變化二
身也。念佛之時佛哀衆生。心佛衆生三無差別。來
迎化佛抑何所現哉。淨土莊嚴抑何所變哉。滅罪
生善又何所作哉。因果之唯識。理智之唯心。不知
之者只呼爲諸佛。能悟之人悉觀爲一法。可悲末
代見之如塵矣。

『解脫上人小章集』唯心念佛（日藏六十四 pp.20-22）

以上の三門は皆心の言は仏及び衆生中に通ず。心と仏と衆生の三を以て
三門に相配するには非ざる也。既に衆生及び仏を以て皆心に帰すが故に唯心觀也。
我が宗の義門は誠に且千と雖も、粗ぼ大綱を尋ねれば三門に過ぎず。所謂
體用門。因果門。相性門なり。各の不一不異の門有り。其の理性は
還りて初めの二に通ずべし。今三重は即ち其の趣に依るか。又第一に
一念の中に於て之れを論ず。抑も經文に心と仏と衆生の三種を挙ぐ。今三重
は各の二を開きて能念所念と為す。心の一字を以て其の二種の中を會通すべき
也。

問ふ。念佛の功能世の挙げて依る所なり。未だ知らず、唯識觀に何の勝利有るや。
答ふ。深密經中に不了義經の信解修行を以て了義教に対するは、
所集の功德は百分が一に及ばず。乃至喻へて知るべくも難し。と云云。何に況や
無相觀門は眞の念仏と為す。諸經の中其の証幾許なり。凡そ法と云ひ
仏と云ひ其の体是れ一なり。能念所念何ぞ唯識に非ざる。所謂唯識の体は
諸仏菩薩の眞實心也。大定大智の一念相應して、大願
大悲の万德融通す。無辺の德海之れを唯識と名づく。仏に三身有り。
法に五種有り。識の實性は眞如にして是れ法身佛也。識の自相等の四種は
是れ自受用身也。識の所變と識の分位は是れ他受用と變化の
二身也。仏を念するの時、仏衆生を哀れむ。心と仏と衆生の三は差別無し。
來迎の化仏は抑も何の所現なるや。淨土の莊嚴は抑も何の所變なるや。滅罪と
生善は又何の所作なるや。因果は之れ唯識なり。理智は之れ唯心なり。之れを知らざる
者は只呼んで諸仏と為す。能く之れを悟るの人は悉く觀じて一法と為す。悲しむべし
末代之れを見るに塵の如し。

唯心念仏

三対の事

三界は唯だ一つの心である。心の外に別の存在はない。心と仏及び衆生の是の三つに差別はない。

一つには能化と所化の対

仏は教化するもの、大悲は私を救う、私は教化されるもの、信心と念仏は譬へば二つの鏡を向かい合わせて互ひに照らすようなもの、心と影像ようざうと本質ほんしつの三つは展転して別のものではない

二つには因位と果位の対

今の此の三界は、永いこと善根功德を修めて、そうして一心を悟るのである、則ち是れが大覚である、種子が現行するというのは、ちやうど種と果実のようである、今は凡夫であつて後には仏になる、どうして別人であるといえようか

三つには俗諦と真諦の対

作られたものの現実の相は、凡夫と聖者と異なるとはいつても、無我という本質的真理の上では、迷いと悟りとは違いがない、妄想の心によつて、真実一如の仏を念ずるといふことは、本質的真理に還れば氷と水が、氷結するのと氷解するのと姿は異なつても一つのものであることに似ている

我が宗の教義の門は実に千もあるとはいつても、概略の大本を尋ねてみれば三つの門に過ぎない。所謂、体用門、因果門、相性門である。三つの門にはそれぞれに不一不異の二門がある。今、三重というのはその不一不異の趣に依るのだろうか。また第一の能化所化の対は自他の身の対、第二の因位果位の対は自身の中の時間的前後の対、第三の俗諦真諦の対は一念の中にこれを論ずれば、その本質的

真理は還つて初めの二つに通ずるのである。そもそも経文では心と仏と衆生の三種を挙げてゐる。今の三重はそれぞれ仏と衆生の二つを開いて能念と所念とする。それは心の一字を以て仏と衆生の二種の中に通じさせるべきである。

第一対 能化と所化の対

仏に心があり、衆生もまたそうである。心という言葉は仏と衆生に通じる。仏の心の上に衆生に似た相分が現われる。その相分は仏の心を離れない。外の対象も相分を離れない。このように衆生の心の上に仏に似た相分が現われると、その相は外の対象である仏を離れない。観想の行者が自ら信心を發して仏を觀する時、仏を自分に随伴して自己の心の中に入る。此の觀想がたとえ弱いものであつても、如来が大悲智を以て私を照らす時、私の身心の影が、仏の鏡のような智慧の上にはつきりと顯現するのである。私の禪定は仏の心の内に住するのである。若し人が疑つて、外の対象は縁ずる者の心を離れている。どうして衆生が仏の心に住し、仏がまた衆生の心の中に住すということがあろうかと云えば、答えて云えばよい。外の対象は識内の相分である影像ようざうを離れないし、影像が既に心を離れないのだから、外の対象は皆、縁ずる者の心に住するのだといふべきである、と。

第二対 因位と果位の対

今、凡夫の位を衆生と名づける。当来に自分が証すべき果を仏と名づける。仏徳の種子は自分の第八阿頼耶識の中にある。その種子という因は当来の果と別ではない。当来の果も今の因と別ではない。衆生の位と仏の位は一念の心と別ではないと知るべきである。心は因果の二つの位を通じてある。凡夫の時も仏を離れないし、仏の位にあつても凡夫を離れない。因果の二つの位は不即不離であるがためである。

第三対 俗諦と真諦の対

一念の心の中に真俗の二諦がある。現象として衆生であるが故に虚妄であるとはいつても、本来は仏であるが故に真実である。仏性は如来蔵と名づける。万の徳を悉く具足している。どうして遠くに当来の果を求めるのか。今の心も本性はもと仏である。譬えば氷と水のようなものである。俗諦は氷のようである。真諦は水のようなものである。氷と水とは不二である。虚妄と真実とに何の隔たりがあるだろうか。故に今仏を念じ仏を觀想することは、私を教化する仏を仰ぎ見るのに似ているとはいっても、諸仏は同体の仏であり、釈尊の三身もそのまま私自身の仏性を離れてはないのである。

以上の三つの門は皆、心という言葉は仏と衆生の中で通じる。心と仏と衆生の三つを以て三つの門にそれぞれ配当するのではない。既に衆生と仏をしてすべて心に帰す故に唯心觀である。我が宗の義の門は千もあるといつても、ほぼその大綱を尋ねてみれば三つの門を過ぎない。いわゆる体用門、因果門、相性門である。

おのおのに不一不異の門がある。その本性は還つて初めの二つに通じるのである。今、三重はその趣旨に依るのだろうか。また第一に一念の中でこれを論じる。そもそも經文には心と仏と衆生の三種を挙げる。今、三重はそれぞれ二つを開いて能念と所念とする。心の一字を以てその二種の中を会通すべきである。

問う。念仏の功能は世の挙げて頼りにする所である。未だに知らないことだが、唯識觀に何の勝利が有るのだろうか。

答える。深密經中に不了義經の了解と修行法を以て了義の教えに對抗しても、集めた所の功德は了義經に説くところの百分の一にも及ばない。あるいは喩えでもつて知ることすら難しい。と云う。ましてや無相の觀門は眞の念仏である。諸經

の中でその証明はどれほど多くあることか。およそ法と云い仏と云いその本体は一つである。念ずるものと念ぜられるものと、どうして唯だ識でないことがあるか。いわゆる唯識の本性は諸仏菩薩の眞実心である。仏の大禪定、大智慧の一念が相応して、大願大悲の万徳が融通しているのである。無辺の徳海をこれを唯識と名づけるのである。仏には三身が有り、法には五種が有る。識の本性は眞如であつてこれは法身仏である。識の自相等の四種はこれは自受用身である。識の所変と識の分位はこれは他受用身と變化身の二身である。仏を念ずる時、仏は衆生を哀れんで下さる。仏を念ずる心と仏と衆生の三つは差別がない。來迎の化仏とはそもそも何が現れたものか。淨土の莊嚴はそもそも何が變じたものか。滅罪と生善はどういう行為であるのか。因果というのも唯だ識である。理智ということも唯だ心である。このことを知らないものは、ただこれらを諸仏と呼ぶ。よくこのことを悟る人は悉くこれらを觀じて一心の法であるとする。悲しむべきことに末代の者はこのことを見て塵のようにつまらないものと思つていのである。

★法相宗 法相宗は〈唯識宗〉（慈恩宗）とも呼ばれ、唐代に、玄奘のもたらした唯識系の経論、特に『成唯識論』に基づいて、玄奘の高弟慈恩大師基により創立された宗派である。玄奘による『成唯識論』の漢訳を助けた基は、同書に対する注釈書として『成唯識論述記』二十巻及び『成唯識論掌中樞要』四巻を著し、また同論に関連する種々の重要テーマを詳しく論じたモノグラフ集『大乘法苑義林章』七巻を著述するなどして、法相宗の教義を確立した。

【教義の概要】本宗の教理の根幹は、すべてのものが自己の心の投影であるとする唯心論（唯識説）であり、より詳細にいえば、自己の身心（有根身ならびに八識）と世界（器世間）のすべてが、自己の最深層の心である阿頼耶識の中に蓄積された過去の経験の潜在余力（習気・種子）から生ずるといふ、いわゆる〈阿頼耶識縁起説〉である。このような枠組みの中で、本宗の教学は、悟りの智慧の前に明らかになる絶対的な理法（法性）の考察よりは、むしろ迷いの心の構造の分析を通して具体的な現象世界（法相）のすがたを明らかにすることに力を注いだ。本宗が〈法相宗〉と称せられるゆえんである。阿頼耶識説を根幹とする、深層心理学ともいふべき精緻な心理分析の理論を中国仏教界に提供したことは、法相宗の教学の大きな貢献であったといえよう。しかしながら、本宗が、インド瑜伽行派の伝統を受け継いで、有情の悟りの可能性に先天的な差別（五性各別・三乗説）を認めたことは、当時の中国仏教界に大きな衝撃を与え、成仏の可能性をすべての有情に認める人々（一乗説）との間に、激しい論争（三権実論争）を巻き起こすこととなった。

【展開と影響】基以降、法相宗の教学は、慧沼（650-714）、智周

（668-723）へと受け継がれた。しかしながら、上述した五性各別説への批判、さらには法相宗に特有の厳密な分析的思考法が必ずしも中国で高く評価されなかったことも相俟って、玄奘の個人的名声に基づくその門流の一时的隆盛ののちは、法相宗が中国仏教界の主流を占めることはなかった。とはいえ、法相教学の概念の多くが華嚴教学のなかに組み込まれていることは周知の事実であるし、その他、初期北宗禪文献や密教文献にも、法相唯識系の概念が認められるなど、その後の仏教教学にかなり広範な影響力を及ぼしていることは、注意すべきである。また、宋・元代に至るまで華北を中心に相当広範に法相宗が学ばれていたことが、最近の研究により指摘されている。

【日本への伝来】一方、道昭、元昉などによって日本に伝えられた法相宗は、元興寺（南寺）と興福寺（北寺）を中として学ばれ、南都六宗のうち最も有力な宗派として栄えた。中国における三権実論争を引き継ぐかたちで、日本でも三乗説の立場に立つ法相宗の徳一と、一乗を主張する天台宗の最澄との間に激しい論争が交わされ、この論争は平安時代を通じて繰り返されることとなった。しかし、鎌倉時代になると、良遍（1194-1252）により法相教学と一乗仏教とを融和させる試みもなされている。中世以降、宗派としての法相宗の勢力は振るわないが、その教学は仏教の基礎学として広く諸宗派の学僧によって学ばれて近年に至っている。

★三界唯一心 「心外無別法 心佛及衆生 是三无差別」

この句は華嚴經十地品の第六現前地の经文、特に八十華嚴の〈三界所有、唯一心〉に由来するもので、〈心外無別法〉（心のほかに別のものは

ない)の句と対句をなして行われる。三界(欲界・色界・無色界)の現象はすべて一心からのみ現れ出た影像で、心によってのみ存在し、心を離れて別に外境(外界の対象)が存在するのではないという意味である。サンスクリット原典には「この三界に属するものはすなわち唯心(citta-mātra)である」、また如来によって分別して演説されたこれら十二有支であるところのもの、それらすべてもまた一心(eka-citta)に依るものである」とある。

漢訳の六十巻本には「三界は虚妄にして但一心の作なり」、「十二因縁分は皆心に依る」と記されている。一般には「三界が虚妄である」というのは般若の空を指し、「但一心の作である」というのは諸法実相の立場に立つことを意味し、「十二因縁分」云々は雑染(煩惱に汚されたもの)なる十二因縁分(十二有支の縁起によって生成している具体的な人間存在)が清浄なる一心に依止している点をいうのであると解釈されている。

〈三界唯一心〉は唯心偈の一節の〈心仏及衆生、是三無差別〉とあわせて、古来、華嚴経の主意である唯心縁起思想を端的に表すものとして言い習わされている。

認識内容の根拠となるものをいう。護法の系統の唯識派では、識の中に、見るもの(見分)と見られるもの(相分)があり、その対象(相分)はさらにその識の外の対象に基づく場合があると考えられている。その場合、識内の相分を(影像^{えいよう})、阿頼耶識によって現し出された外的対象を(本質)と呼ぶ。たとえば、眼識は阿頼耶識が現す器世間を本質として、影像と本質の関係を、(親所縁縁^{えんねん})〈直接的対象〉と(疎所^そ縁縁)

★理性

(間接的对象)と呼ぶこともある。

理性は事相に対する言葉で、本性的世界を表す。有為の現象世界に対し、そこを貫通する不変の実性が理性である。単に〈理〉ともいう。なお仏性に関して、理仏性(真如)と行仏性(智の因、種子など)を分けて説く場合があるが、その理仏性の意味で理性が用いられる場合もある。日本で明治以後、カントの Vernunft(推理の能力)の訳語として理性が応用されたりしているが、少なくとも仏教という理性は、認識論的よりも存在論的である。「天台宗・真言宗を除きて余の宗は、理性の仏を許さず。故に我が身の中に本有の仏ましますと知らざれば」「菩提集」

★体用

〈体〉と〈用〉。〈体〉は実体あるいは本体、〈用〉は作用あるいは現象、の意味に解されるが、より一般的にいえば、〈体〉とは根本的なもの、〈用〉とは派生的・従属的なものを、相関的に意味すべく用いられている概念である。

★性相

存在するものの本性(ものそれ自体)とそのすがた、または、唯一・根本の真理と多様な現象をいう。法相宗ではこれを〈三性〉との関係で2種に解釈する。すなわち、一方では、〈性〉は存在するものそれ自体をいい、〈相〉はそれに具わる三性のことであるとし、他方、〈性〉は三性のなかの円成実性、〈相〉は依他起性であるとする。なお、法相宗・俱舍宗の学問を性相あるいは性相学というが、この意味では(しようぞう)と読むのが普通。「この不思議の一心の中に性あり、相あり」「法相二巻抄上」

★為言

ある特質を定義したり、あるものの語源説明をする際用いる。